アクティブ・ラーニングを取り入れた人権学習の推進

～グループ活動を中心に～

人文学部　教育・臨床心理学科　教授　野　口　　徹

「人権学習」といえば､「できれば受けたくない」といった、学生が敬遠しがちな講座名である。しかし、教壇に立つからには、一人一人の子どもの人権を大切にし、暖かい学級経営や授業を推進するためには大切な学習である。そこで、学生が楽しみながら学習し人権に関する知識を深めるために、一方的な講義形式ではなく学生参加型の講義形式を取ることにした。

学生の自主性を引き出し、他学部の学生とも交流が深くなることをねらって、グループを作り、グループ討議、グループ活動を中心に学習を進めた。グループは６人から７人、編成はできるだけ多くの学部、学科が入り交じるように教師側から指定して16のグループを作らせた。授業の前半は教師が講義を行い、後半の20分から30分を講義内容に関連するテーマを与えグループ討議を行わせた。初めのうちはぎくしゃくしていた班での話し合いも、講義の回を重ねるにつれてスムーズに進み、全員が発言し内容にも深まりが出るようになった。

その大きなキッカケが「ユニバーサルデザイン新聞」づくりである。人に優しい社会づくりのため、全世界で取り組まれているユニバーサルデザインについて調べ、全員の前で発表・提案するというものである。４回の講義を使い２コマをテーマ決定、調査、まとめ、後の２コマを全グループで全員が発表することにした。調査、まとめは講義中にできるものではなく、時間を都合してグループで集まり調査し検討を重ね､新聞を作っていった。

その際、指示したのは次のようなことである。

> 身の回りにはどこにどんなユニバーサルデザインがあるかを調べ、考えたことや、今後どうしたら住みよい、暮らしやすい社会になるかを提案しなさい。

・ユニバーサルデザインについて知る
・テーマは自由
・調べたことをもとに班でまとめ、新聞を作る
・感想や提案を必ず入れる
・教壇の上で受講者に向かって全員で発表する。分担なども決めておく
・発表資料なども合わせて作っておく

○新聞のタイトル例

・ようこそ！ユニバーサルデザインの世界へ！
・場所・種類から見たユニバーサルデザイン
・日常生活におけるユニバーサルデザイン
・大学生活の中にあるユニバーサルデザイン
・世界のユニバーサルデザイン
・○○家の１日

などがあり、グループによって個性はあるものの、内容的にも充実した人目を引く新聞ができあがった。

発表においては、７～８分の限られた時間の中で、グループ全員が分担して教壇の上に立ち、発表を行った。パワーポイント、模造紙、拡大映写機など機器を活用し受講生に訴えていった。２年生中心の講座であるため、教育実習経験者はほとんど無く、人前で話すという経験もほとんど無いものばかりで、教壇の上で話すということに緊張を隠せないものばかりであったが、話し終わったときの安堵感やグループの達成感が伝わってきた。

○グループのまとめより

・ユニバーサルデザイン（以下ＵＤとする）は気がつかないだけで、身近にはたくさん存在している。
・私たちが教員という立場になった時、児童生徒に向けてＵＤの知識や認識を広めていくとともに、ＵＤを必要とする児童生徒のために、教員自身もＵＤについての知識や認識を常に持ち続ける必要がある。
・ＵＤがもっと増えることにより、人に優しい社会、より良い生活ができるようになる。
・外国のＵＤを見ていくことで日本と比較することができ、日本の良さを見出すことができた。

個人個人にも自分たちの班以外の全班について３～４行の評価や感想と「全体の感想」を書かせた。

○個人の全体感想より

・この４週間にわたるＵＤの授業を受けて、自分の生活は、ある人が他人に対する思いやりをもって考えたＵＤに囲まれているということを実感しました。ただ、ＵＤはまだまだ改善できる点があることや、スロープなどが存在して負担を軽減しているが、自

分たちが手を貸すことでさらに負担が軽減できるものがあることも分かりました。これからＵＤがもっと増えていき、どんな人でも快適に不自由なく生活できる未来が早く来て欲しいと思いました。

・ＵＤの新聞を作って、こんなにも身近に色々あるんだなと思ったのが一番の印象でした。何気なく普段使っているのもＵＤなんだと感じることが多かったです。ＵＤはバリヤフリーとは違い、本当に誰に対しても平等に使えるようにできているんだと知ることができました。

・他の班の新聞は、本当に様々な工夫がされていて、絵が挿入されていたり、パソコンで本当の新聞のようにできていたりすごかったです。中でも、最後にまとめを話す人は、上手にまとめて話せていて、その力に感心しました。人前に出て話すのは緊張するのに、堂々としていて、すばらしい発表会でした。私も他の人を見習って人前で話せるようになりたいと思ったし、自分の班と比べて発表を聞くことができて、楽しかったし勉強になりました。

近年の学生は「指示待ち人間」とよく言われるが、方向性を示すことで積極的に調査を進め、協力し、楽しみながら新聞を作ることができた。

15回の講座を終えたときの感想の中に、「他の学部、学科の人たちと仲良くなれて良かった」「最後のほうになるとグループの話し合いが活発になり、（このグループでの学習を）もっと続けたいと思った」などがあり、学生のやる気を引き出し、楽しい学習を推進するにはグループ活動は効果的な方法であると実感した。

参考文献

教育課程企画特別部会　論点整理　　文部科学省
「教育課程の編成に関する基礎的研究　報告書５」
平成25年３月　国立教育政策研究所
「21世紀型能力」Ｐ・グリヒィン他　　北大路書房
「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」
溝上信一　　東信堂